

野口米次郎『日本少女の米國日記』

—奨励される女子の渡米と移民社会の現実

堀 ま ど か

はじめに

二〇世紀は、ひとつには、移動の時代、そして『国民国家』の時代であったといえるが、この点において、野口米次郎という作家は、波乱の世界状況を生き抜いた一日本人として、国家間で流動的な立場を維持する一個人として、重要な研究対象である。野口は、日本文化の紹介者として、又詩人として、英語で執筆し、また日本語でも執筆した作家であるが、新渡戸稲造や岡倉天心のようにには取り上げられず、既成の研究や文学史の枠組みの中ではほとんど認められていない。その原因としては、野口が戦時中に帝国主義を賛美した為ということがよく言われるが、同時に考えられるのは、彼が詩人という立場に徹して日本紹介文や日本文化論を書いたということの稀少さと、その出発が、知識階級やキリスト教関係者ではなく、貧

しい初期移民群の一人であったという経歴の異質さである。また、彼の多岐にわたる著作が、二〇世紀初頭の世界的な文化混交の枠組みの中で、あるいは日本社会の中でどのような位置にあるのかということを、明確に把握しようとした研究がなされていない、という事実がある。

野口の最初の散文である『日本少女の米國日記』は、野口の詩や評論にもまして取り上げられることのない作品であるが、国家間を生きる作家としての原点を示すもの、また同時代における野口の視座の特異性を示すものとして、大変重要である。これは、米國で一九〇一年に出版された『The American Diary of a Japanese Girl』が好評を博し、一九〇四年、野口の帰国した年、日本においても英語のまま『The American Diary of a Japanese Girl』が出版され、翌年の一九〇五年に日本語版で『邦文日本少女の米國日記』が出版

されたものである。これらのテキスト成立における問題、同時代評については、拙稿「野口米次郎『日本少女の米國日記』の日米における評価」を参考にされたい。

この作品は、野口の自伝的要素の濃い日記形式のもので、十九歳の日本人少女の視点で、渡米までの心境、米国での体験、生活などが描かれている。²「少女」という視点でとらえる世界観や描写は少々表層的ではあるが、日米両社会や同時代の言説群から鑑みると、野口の、初期移民群の一人として渡米した者の特異な視座を示す、注目すべき点の多い作品といえよう。

本稿では、一九〇〇年代初頭の女子渡米奨励論と渡米熱のなかで、野口米次郎のこの作品がいかなる意義を持っていたか、主人公の渡米への並々ならぬ期待と憧憬の内実をいかに捉えるべきかについて考察する。渡米奨励者や殖民事業における女子渡米奨励の言説と、女子渡米者のおかれた現実との乖離は、この作品の中でどのように考えることができるのか。またさらに、主人公の日本文明に対する批評や、米国社会における「日本」認識への不満について、検討したい。

この論文において、米國、米國、アメリカという表記が混在するが、野口の執筆当時の表記である「米國」、合衆国やその社会風俗そのものを示す「米國」、当時の日本人たちが合衆国を表象して用いた「アメリカ」ということで大らかに使用していることを、最初

に付け加えておきたい。

1 女子渡米奨励論

渡米熱と野口米次郎

この作品は、渡航準備の描写から始まるのだが、主人公である朝顔嬢の渡米への強い志望と米国社会に対する期待が繰り返し強調される。彼女は、《常に夢に見つゝあつた亜米利加國といふ國》に渡れることは、自分の輝かしい未来の幕開けであると考えている³。祖国を棄てても米国に行きたい、米国で生活したい、米国人になりたい、と米国に強い期待と憧憬とを持っている。

周知のことだが、海外移民は明治初期より存在し、その啓蒙活動も始まっていたが、明治半ばになると海外殖民事業の登場とともにさらに海外移住論が展開されてゆく。雑誌においても理想的な目標を掲げた海外移住を奨励する「殖民・移民論」が多くの誌面を占め、また、一九〇〇年代に入ると、立身出世主義と成功願望とを扇動する渡米案内書や渡米案内雑誌が数多く出版される。⁴「渡米案内」類では、北米移住の有利性、様々な実益の示唆、渡航地で期待できるものについての情報などが、マニユアル的に解説された。在米日本人の手紙や通信を「実例」として掲載しながら、米国における生活状態や環境、就労条件などに関する詳細な記述を示しているものが多い。このような案内書はエリート留学生のみならず、苦学生や

出稼ぎ書生などの体験者や在米者などが書くことが多かったようである。

野口米次郎はこのような渡米熱の高まる一九〇四年、日本に帰国している。野口の海外での活躍は、〈成功〉として、日本国内において雑誌や新聞などで伝えられており、特に帰国当初はその成功までの経緯が注目された。

たとえば石川啄木も、文学を志す青年として、また英語に関心を持っていた詩人として、野口に関心を寄せていた一人である。啄木は、野口の欧米文壇での成功の契機となった『From the Eastern Sea』について、『詩風想像の傾向を代表して、又一面に日本民族の詩的天職の根本的性質を渾円球上に標榜し出したる者』と賞賛し、野口宛てに渡米の意思を伝え送っている。また、野口と同時期に在米経験のある永井荷風は、実業を重んじる父親の意見に従って米國遊学したのであるが、父親からは野口のように自力で欧米文壇での成功をつかむことを望まれていたようである。

つまり〈成功〉をおさめて帰国した野口が、当時の日本社会や渡米希望をもつ若者たちやその親たちに及ぼした影響力は、計り知れないものがあつたと思われる。野口の言論や作品は、当時の渡米熱をあおる情報メディアとして大きく機能していたといえる。

〈女の國〉と表象されるアメリカ

この当時の渡米熱の高揚は男子のみならず女子にも同様で、実際、女子に向けての渡米奨励もさかんなされていた。米國が、女子教育についての議論の中心となる國であつたことを考えれば当然ではあるが、米國紹介は女子啓蒙や女權拡張意識の啓蒙活動と重なる意義をもっていたといえる。主人公・朝顔嬢は渡米を前にして、次のように述べる。

『私は幾年の間結婚の申込みよりかもつと眞面目な何かが起つてもらひたいと祈つて居ました。

私は私を『女が先づ第一』といふ有名な國へ持つて行くといふ有り難い運命は常に待つて居た『何か』ではあるまいかと思ふの。

私は女であつて亞米利加へ行くのを喜びます。』

つまり、朝顔嬢の渡米願望は、女性の権利を最もよく認めている國という認識からくる、米國社会への期待感からきている。このような認識は、当時の女子啓蒙者の言説のなかではとりたてて特異なものではない。

たとえば帰國当初、野口は『女學世界』に米國の家庭生活を紹介する記事を書いている。『女學世界』は、『日本之女學』『婦女雜誌』などを既に発行していた博文館の女性向け教養雑誌で、一般女性の

育成に役立つ教養、更に言えば良妻賢母的教養を示すことを目的として発刊されている。この雑誌には、創刊（二九〇一年）以来、米国に関する文章は非常に多く、特に渡米経験者の帰国談の寄稿が多い。外国文化や海外生活に関心がむけられるなかでも、特に米国は、女性たちにとって憧れの地であったようである。

《米國婦人と云へば、「世界で一番幸福なる一番勢力あるものである」といふ考が、直ぐ日本人の頭に浮んで來ますが、私が渡米以來の觀察に徴するに、實際であるやうに思はれます。》

当時の日本において、米国が女性の権利の強い国であるということは、既に広く知られたイメージであった。スタンフォード大学で学生生活を送った飯島立峰は、女性を「國民の一人」といい、国家繁榮と国力増強のために女性の知力体力などの強化が必要であることを力説する。飯島の意見は、老若男女、貧富の差を問わず、渡米して社会を比較し見聞してみること自体が、新しい日本社会の設立のための貢献になるというものである。米国の女子教育の実態例や方法を示しながら、日本の女性が米国の教育機関で学ぶことを奨励しているのである⁽¹⁾。

しかし、飯島のように教育のための渡米を奨励するもの以上に多いのが、労働者の立場での渡米を奨励する言説である。竹貫佳水は、

看護婦や産婆の《資格を持った方々はドシ／＼行つて、金儲けなさるが可い》と読者の渡米意欲を鼓舞し、仕立屋や洗濯屋などについても、《我々同胞姉妹の手藝に堪能なることは、既に広く一般外人に認められて居る》ので《随分行末見込みのある職業である》と紹介している⁽²⁾。当時の女子向け雑誌には、このような女子労働者の需要や、その実情について記したものが、非常に多くみられる。『女學世界』などの雑誌が読者対象とする、下層の労働者階級ではない女性たちにとっても、教育のために渡米するというよりも、労働のための渡米の方がより現実的な期待をもたせるものであったといえよう。『女學世界』には、実際に女子に洋行の手段・方法を示し、渡航の決断を促すような記事も多くみられる⁽³⁾。移民や洋行者増加の時代背景のなかで、米国での労働や教育の機会を示し、渡米を奨励する風潮が明らかにあったのである。

しかし、これらの渡米奨励の言説の背後には、女子の啓蒙的意義があっただけではない。同年、安部磯雄は「米國土産」で《日本の婦人が今少し盛んに渡米せねばならぬと云ふ事》を滯米中に痛感したと述べている⁽⁴⁾。キリスト教社会主義者である安部磯雄が、この一九〇五年時点では渡米奨励を説いていることは非常に注目すべきことであろう。安部は、米国における女子教育、共学の大学での様子や自活する女子学生の一例などを挙げながらも、論の主旨は労働のための女子渡米奨励である。

《……婦人が渡米して、果して都合善く女の仕事の有つて、能く獨立自活出来やうかと危ぶむ人も有らうが、其心配は御無用で有る、太平洋の沿岸一帯は何所にでも、日本婦人の容易に出來得る、而も割の善い仕事は澤山に有る、故に婦人と雖も渡米して三年か四年位辛抱すれば、千弗や千五百弗の金は譯も無く貯蓄が出来るので有る、……》

ここにおいても、前述の竹貫と同様、米国における日本人女性の労働力需要が強調されている。米国で働く際の労働賃金の相場は、日本国内よりも高かったことは事実であるが、物価の違いや、移民社会の事情は示されていない。

安部は渡米の旅行券を得るためのいくつかの方法を示し、それを遂行して米国へ上陸することさえできれば心配はないと断言する¹⁷。キリスト教教会が初期の日本人コミュニティの中心的な母体となっており、日本人は実質的にそこを頼っていたようだが、渡米後の世話などの恩恵を受けられるのは、ごく一部の苦学生に限られていたといわれる。実際には多くの渡米者が想像を絶する苦難を強いられる運命にある。しかし、安部は《上陸さえすれば》と主張し、渡米後の女子が容易に就職できること、また賃金が大変良いことを、無邪気なほどに強調しているのである。

当時の日本社会では、工業化の進展と都市化現象の中で、女子を労働力とみなす背景ができていた。女性たちは貧しい農村を離れ、繊維・製紙・製茶工場などの女工として、旅館・飲食店などサービス業の従業員として、あるいは建設現場や炭鉱の肉体労働者として働きはじめていた。男性同様、女性たちにとっても、家を離れて出稼ぎ労働に従事することが珍しくなくなっていたといえる。仕事を求めて海外へ出ることは女性にとってもそれ以前ほど抵抗のあることではなかったのではないか。女権の強い国アメリカで、男子に頼ることなく自らの力で大金を稼ぎ、自立した生活を送ることができるといふ話は、当時の女性たちにとって大きな魅力であっただろう。作品内の朝顔嬢がみせる米国への大きな期待と憧憬とは、このような日本社会を背景にして成り立っているといえる。述べてきたように、女子教育や女子向けの言説の中で、米国は「世界で最も女性の権力が強い国」と幾度も繰り返されており、当時の女性たちにとってアメリカは「女の国」「理想の国」を表象していたといえる。朝顔嬢が《『女が先づ第一』》と考え、確固たる意志をもって渡米をした姿は、このような時代状況の中で確実に捉えることができる。

以上のように、女性にとって日本国内よりはるかに恵まれた労働の場として米国を紹介している渡米奨励者たちは、明らかに、女性読者に米国での生活の有益性を誇大に説き、渡米後の生活、移民者

としての現実的な問題には一切触れていない。しかし、実はこれらの言説の裏には純粹な女子啓蒙の目的とは異なる、政治的目的が含まれているかもしれない。次にこれを説明しながら、野口の作品考察にもどりた。

女子殖米の必要性

安部は次のように述べている。

《若し北米の太平洋沿岸をして眞に大日本帝國の殖民地として成功させやうとしたならば（是非せねばならぬので有る）今後大に婦人の渡米を奨励する必要が有る。第二の日本は男子ばかりでは出来ないで有る、元來婦人の伴はぬ殖民は古今東西、何れの國に於ても終局の成功を見る事が出来ない事になつてゐる、それに關はず我國では外國の渡航にはむづかしく制限を加へられるのは、甚だ愚昧な話である。》¹⁹⁾

つまり、日本の殖民地政策の成功のために、女子殖民の必要性を主張し、それは女性の日本国民としての使命であるかのごとくである。安部にとつての女子渡米奨励は、国家のため、そして男性渡米者の生活改善のためという、「大義」からきているのである。²⁰⁾ 移民社会における日本人（醜業婦）の頭在化を憂慮し、当地での日本人

性の面目を回復するためには、女子の渡航取締りを強化しながら、教養のある女性の渡航を自由に求めるべきであると主張している。男子同様に女子を自由に渡米させることは、移民男性を墮落から救済し、同時に移民事業を強化して日本国家の繁栄につながることもあるとする。

しかも犯罪的なことには、安部は、移民男性との結婚を奨励することはあまりに直接的で不躰で、教養ある女子には不満だろうから、そのような言い方は慎むべきであると述べている。つまり、教養ある女性が貧しい労働生活を余儀なくされている男性との結婚という名目では、決して渡米の希望をもたないことを予測して、男性に依存することなく自活できることを一義的に説いて、女子に渡米奨励をすべきである、と述べているのである。

安部は《種々なる點より觀察を下し種々なる人の説を聴いて》女子の渡米の必要を感じたというが、實際この当時は、移民・殖米についての同様の言説が多くみられる。女子を渡米させて在米男性たちと結婚させることで、短期的な出稼ぎ労働者である男性渡米者の定着をはかると同時に、その地で子孫を繁榮させ、日本国の世界的な繁榮を願うという論である。日本において盛んであった良妻賢母思想が、移民地においても使用されていたといつてよい。

なかには、不躰に移民男性の結婚相手としての、よき妻よき母の役割としての女性の殖米をあからさまに説いているものもある。安

部と同様にキリスト教社会主義者であり、渡米案内本の著者で有名な島貫兵太夫⁽²²⁾の妻が、『殖民成功の内助者たる家庭の女主人を内地より派遣すること』の必要性を述べ、『家庭の天使即ち慰藉者の缺乏』を指摘し『志の確かな婦人を送つて殖民の成功を助けたい』と主張している⁽²³⁾。

ここには明らかに、当時盛んであった「良妻賢母」思想が移民・殖民の言説にもそのまま持ち込まれていることがわかる。ただ、この渡米奨励の言説では、家庭内での性別役割分担としての「良妻賢母」主義ではなく、労働者としての役割をも期待するものである。

渡米者は結婚しても夫婦共働きしなければならないと説き、『日本上流の令嬢で彼地堂々たる商店の主婦』でさえも「一人の下女も置かず終日家事に労働」しているのだから、他の者はもっと働かななくてはならないと述べている。また、『夫妻心を一にして富を得、併せて国益を計らうと云ふ大希望の前には少しの困苦も打消されて了ふ』のだと述べて、夫と協力して国家に貢献することを説いているのである。男性移民者の「慰安者」となり、「良妻賢母」として殖民政策を助け、かつ労働者として働いて、日本国民としての役割を果たすということが求められている。

さて、『日本少女の米國日記』の考察に戻りたいが、この作品内にも、疲弊した男性を癒す存在としての日本人女性の必要性を示している部分がある⁽²⁴⁾。

作品内で、煙草屋の店番をしている朝顔嬢と会話するために、日本人男性移民たちが何度もやってくるが、朝顔嬢は日本人男性に対して『あんな顔見るのもうんざり』だと述べる。米国上陸して以来、生き生きとした顔の東洋人はみたことがない、と彼女は嫌悪感を隠さない。

朝顔嬢は叔父に向かって、米国滞在中の日本人男性には、相手となる女性が必要であるということを描し、『私日本の政府に女を送る様歎願したいわ。』と述べている。そして、日本女性がもっと渡米してくることを期待する一方で、『不器量な者ばかり来たら日本女の名譽を滅茶苦茶にするでしやう』と述べる。

この朝顔嬢と叔父との女子渡米についての会話は、日本における政治的な観点からみる女子渡米奨励と重なる意見である。朝顔嬢は、きちんとした日本女性の渡米を求めているが、彼女が危惧を表わしている不名誉な『不器量』な者の渡米とは、『醜業婦』の類を表わすものである⁽²⁵⁾。

安部の言説にも出てくるが、女子の渡米推奨の根本には「醜業婦」の問題がからんでいる。米国の新聞は非常に早い時期より売春婦問題に注意を向け、日本人売春婦が増加していくことに反発していたという⁽²⁶⁾。また、その周囲で飲酒、博打、買春などの行為にふける日本人移民も、米国社会からの非難の対象となっていた。日本政府の官吏たちは、売春婦に関する報告を外務省に送り、売春婦の日

本出国を阻止するよう主張した。官吏たちも日本政府も国家と国民のイメージに非常に注意を払っていたのである。²⁷⁾

在日知識人たちは、〈醜業婦〉の存在が在米日本人を墮落させ、米国人に排日運動を起こさせることを危惧していた。一般女性読者にむけても、醜業婦について高収入のために〈邪道に陥った〉道徳の欠如した女性たちとして批判するものが目立ち、恐らくこれが日本に住む者の一般的見解となっていたと思われる。しかし実際には、在米日本人売春婦のほとんどが、日本人男性によって米国に連れ込まれた者たちで、誘惑に負けて売春をはじめた者たちではない。²⁸⁾が、これについては論点を外れるのでこれ以上の言及は避ける。以上のように、醜業婦問題の解決案として、政治的な意図のもとに、一般の〈質のよい〉女性の渡米が奨励されていたのである。

このように、一九〇三年から一九〇五年にかけて、『女學世界』のような女子向け雑誌においては、渡米奨励の言説とともに示されるのは美辞麗句や日本国民意識の鼓舞などがほとんどで、米国での現実の生活を描写したリアルな報告はほとんどみられないと前述した。現実的な渡米労働者の様子が示されるのは、一九〇七年に入っていることである。²⁹⁾このような記事が掲載される背景には、ひとつには、この年、激しい排日運動を背景に日米間で紳士協定が結ばれ、日本人の渡米が厳しく制限されたということがある。日本における渡米奨励期の盛りを過ぎた時期であったということがいえる。

さて、このような背景の中で渡米を果たした〈教養のある〉女子には、どのような職業が期待されていたのか。自らの意志で渡米した〈上流階級のお嬢様〉である主人公は米国社会でいかなる状況に置かれてゆくのだろうか。

〈家事使用人〉の推奨

この作品の結末では、朝顔嬢が〈お小間使〉として働くことを決意してゆく。彼女には、上流家庭スカイラー邸において世話になっている頃より、米国上流家庭の一般を学ぶのだという自覚がみられ、スカイラー氏が〈自分の奥様に對するよりもつと女中に親切〉であることを観察していた。それまでの傍觀者のな米国体験に飽き足らなくなったということのようである。

朝顔嬢は、あるきっかけから日本人女性が経営している煙草屋で一週間ほど店番をし、この経験を通して、一般の日本人移民の生活や環境にふれることとなった。それまでは米国の上流階級家庭の客としてしか扱われてこなかった朝顔嬢が、次第に勤労意欲を持つようになつてゆくのである。

そしてある夜、〈女中の群にでも入つて冒険をして見ようかしら〉と考えた朝顔嬢は、〈紐育の家族の状態を知るにはもつてこいの考よ〉と朝食時に発言して、労働許可を叔父に懇願する。そして自ら新聞社に出向き、〈「日本の女、年齢十九、容貌良し、第一流の家

族に労働したし。』という広告を打つ。次の日、新聞社へ届いた二通の手紙のうちの一通、《一ヶ月十二弗の給金》の五番街の家庭を選択する。朝顔嬢は、『麵包のために働く』なんて米國流の響きがある』と興奮し、『五番街』の上流家庭で女中をすることは『第一流の紐育人を見るに適當な場所』であると考え。彼女の『家事使用人』としての勤労志望は、明らかに社会勉強であり、好奇心である。

前述したように、当時の米國の日系移民社会状況から鑑みて、米國にすぐれた女性を送ることは日本國の殖民政策の成功をうながし、日本政府としての米國に対する面目もあがるということがあった。そして、女子の渡米を奨励する者の多くが『家事使用人』という職業を強く推奨していた事実がある。

安部は、『醜業婦』を取り締まると同時に『身分の慥なる女子の渡米を自由』にし、『奨励』するべきであると述べているのだが、最も奨励できる仕事として下女奉公を挙げている。²² 安部は、下女奉公は米國においてそれほど卑しい仕事ではないと強調し、身分の確かな教養ある女性に最もふさわしいとしている。安部は『相當の教育もあり品性も確實』である日本女性が上流家庭の下女働きをしている例を挙げ、はじめの数ヶ月は言葉や仕事に多少困難を感じるけれど、仕事を心得てしまえば賃金のよいところを選んで移住すればいいと述べている。

日本の女性移民は、中国の女性移民と比較すると初等教育を受けていた者が多く、需要が高かったといわれる。²³ 米國において日本女性の家事労働者の需要が高いという意見は、当時の多くの渡米経験者や渡米案内類作者たちによって繰り返されたものであるが、吉村大次郎も『渡米成業の手引』の中で、日本人女性の家事労働の供給が間に合わないことを述べている。²⁴ 吉村は、女中奉公が教養のある女子に最もふさわしい労働であり、通学も可能であると述べている。²⁵ 吉村もまた、安部と同様の目的から女子渡米奨励を行っていたのだが、²⁶ このような説明は、女子教育のお手本である米國での教育を受けられるのかもしれないという期待を大いに持たせることができたとはいえない。

要するに、奨励の目的の中心は男性移民の生活の救済と殖民の安定化のための産む性の必要性であるにも関わらず、女子に向ける奨励内容は理想的な国アメリカにおいて労働し、または労働と同時に学問ができるという名目を使っているのである。そのためにも最も適した職業が女中やヘスクールガールなどの家庭内労働だということである。

さて、野口は『女學世界』の掲載記事の中で、米國の家庭は『健全』で『美麗』であることを幾度となく強調する。²⁷ 米國人は労働も勉強も家庭と女性のためにするのであって、人生の目的は家庭なのだと言いつついる。米國の家庭がいかに理想的なものであるかと

いうことが書かれ、メイドについての説明が次のように述べられる。

玄関の電気仕掛けのベルを鳴らすと、すぐに《下女―バーラー、メイドとして日本で云はゞお小間使の様な少女》が出てくる。その少女のいでたちは《白いキャラコのエプロンを掛けて、頭の上に小い同じキャラコで作った帽子を看護婦の様に載せて居る小作りな綺麗な小女であるから、非常に嬉しい扮装なのである》と説明している。また、髪、靴の美しい様子、エプロンの清潔な様子が語られる。そして括弧つきで、《序であるから云つて置くがバーラー、メイドの月給はまづ十四五弗である》と付け加える。

また、米国では、日曜日の午後には家事使用人に外出の自由時間が与えられることを示す。

《余も奉公人の一人として午後暇を與へられたるを嬉しく思つて、上衣のボタンに何にかの花を挿して街上を散歩したことを記憶している、人何にが苦しいかと云つて奉公人となる程世にも苦しいことは無いのであるが、主人より暇を貰ふて數時間の自由を得たる時の快樂は何に譬へやう……》⁽³⁸⁾

野口は日本の奉公人に同情を寄せ、米国の自由時間を与えられる奉公人の幸福を示している。渡米経験者によるこのような米国紹介文は、女子渡米奨励の言説の一端を担っていたということがいえる

だろうと思う。ちなみに、この「米国家庭事情」の中で、『日本少女の米國日記』とその続編である『The American Letters of a Japanese Parlor-maid』についての紹介がある。「米国家庭事情」の内容には、『The American Letters of a Japanese Parlor-maid』の訳文が使用されている部分もある。野口は『女學世界』の中で、自らの《家事使用人》の体験を紹介し、女性読者の渡米希望の風潮を支えていたといえるだろう。

ここまでの考察で明らかなのは、米国家庭における女中奉公やスクールガールという職種を奨励する言説の多くが、教養のある女性の労働として最も適当であると紹介しており、さらに労働しながら教育を受けることも可能であるという言葉で女性の渡米志望や意欲を誘っていたということである。

一九〇〇年代前後、米国では、家庭の中に経済的科学的な発想を持ち込む時期であり、また、日本においても良妻賢母主義を教育のレベルで浸透させるために、米国の家政学に注目していた。要するに、米国での《家事使用人》を奨励する言説は、労働賃金が高いという前提の上に、さらに米国文化や英語を身につけることができ、さらに米国の最新式の《家政》を学ぶことができる、という意義が強調されている。

明治期の日本で、比較的教養のある女性たちが《職業》的な意識というよりも教養のために女中奉公を志望する傾向があった一方で、

米國で家事労働をするということには、〈労働〉という意識が充分に感じられるのである。朝顔嬢の《麵包のために働く》なんて米國流の響きがする》という発言も、〈労働〉や〈職業〉に対する正確な意識の表れではないかと思われるのである。

ところで、いうまでもないことだが、教養のある女子に適した立派な職業であると強調されている、米國での〈家事使用人〉は、既に日本人男性の従事している仕事であった。この仕事は〈スクールボーイ〉と呼ばれたりするものの、実際には家庭内の使用人であり、日本では下層階級の女性の職業であった。日本の知識人のなかには日本国や日本国民の体面を心配して、日本人男性が米國で下男奉公することを批判する意見もあった。⁽⁹⁾

しかし、そのマイナスイメージはあったものの、米國での〈家事使用人〉体験を経て学者、実業家などになった人々による、スクールボーイ時代の珍談、奇談、佳話は多く出されており、渡米者たちには家庭内労働は人気の職業だったのである。おそらく日本で良家の書生になることと同義かそれ以上の、ある種の名誉を感じることであつたのではないか。永井荷風のような一等の豪華客船で渡米した裕福な部類の日本人さえも、ニューヨークでアメリカ人家庭での家庭内労働の求職広告を出している。⁽¹⁰⁾

野口をはじめとする多くの渡米経験者や渡米奨励者の言説によって、米國の一家庭で働くことは、米國社会の風俗習慣を実体験し、

言葉を練習するために必要だと考えられていた。家事労働やスクールボーイという職業は渡米者に社会勉強のための手段ともみなされて自然に受け入れられる職業であつたといえる。

朝顔嬢が五番街のとある家庭で女中の仕事をすることを決めるという結末は、このような読者一般、とくに女性読者を刺激し、渡米風潮をかきたてるものになり得たのではないかと推察することができる。

ところで、同時期の米國における、日本人の家庭内労働者つまりスクールボーイに対する評価は、あまり高いものではなかったといえるかもしれない。野口の作品よりも後に書かれた「Letters of a Japanese Schoolboy ("Hashimura Togo")」(1909)は、日本人の家事使用人の視点で書かれたものであるが、ウィットに富んだ作風の中に、日本人移民を軽視する様子があることを否めない。スクールボーイが侮辱に無感覚になって金のために働く姿が示され、労働者としての厳しい生活の中で勉学を続けることが事実上不可能であることが描かれている。当時の米國社会における、日本人の家庭内労働者に対するイメージと、米國読者に向けて英語で発表されたこの作品の位置については、検討すべき問題であるが、本稿では扱わないこととする。

2 日本文明批評

結婚制度への反発

この作品『日本少女の米國日記』が、苦難の移民生活の中から〈成功〉を収めた人物の自伝的な要素をもつと同時に、主人公が渡米希望や〈家事使用人〉希望を示すことで、渡米奨励の言説の最盛期にそれを助長するものとなったと考え得ることを述べた。では、この作品は、国家の一員として男性渡米者の生活の安定を図るべきであるとか、米国では労働賃金が高いため簡単に金持ちになれるといった無責任な詭弁を用いる知識人たちの言説に共通するようなものが描かれているだけなのであろうか。結論からいえば、ノーである。この作品に描かれる女主人公は、日本の知識人たちが要求する〈良妻賢母〉的な女子像とは異なり、はるかに進歩的な意識をもった女性である。

《日本の紳士（舊弊な蠻風がお好きな紳士）は今だに娘なんて商賣品であると思つてお出なのぞ。

何日愛戀を了解しにお成りでしやうか。

あんな人達つてありやしない。

私は一面識も無い人から結婚を申込まれた時は、侮辱されたと思ひましたの。

東洋人は文明になる資格が無いと斷言しますわ。

男子の教育、だが——乍失禮——女子の教育ではありませぬ。

光榮ある明治時代に産れた近頃の娘は随分立派な心を持つてゐますからね。

私は自分の勝手にします、笑ひたい時などお母様の許など待つちやあませぬのよ。》

主人公は、日本の結婚制度を強く批判し、明治期の女性意識がラディカルに変化していることを主張している。《東洋人は文明になる資格が無いと斷言しますわ。男子の教育、だが——乍失禮——女子の教育ではありませぬ。》の部分は少々日本語がわかりにくい、英文から解釈するに《東洋男性は文明人といわれる資格はないけれども、教育を受けた女性は違う。文明開化した明治時代の女性たちは、新しい魂をもっている。》ということ言いたいのである。朝顔嬢を含めた明治期の教育を受けた女性たちは、明らかにそれ以前とはことなる意識をもっていると主張しているのである。

周知のことではあるが、明治民法では家父長制的な家族制度が適用され、女性に対する法的な差別が制度化され、明治三〇年代には、この家父長制度や国力増強政策と結びついた《良妻賢母思想》とそれに基づいた教育政策が始まっていく。この時期、このような思想教育によって女性が抑圧されてゆく一方で、新教育を受けて女性の

権利向上を求めるいわゆる「新しい女」たちが出現し始めていた。つまり、女性にとっての抑圧的な法や制度に反抗し、自由や自立を得ようとする思想や運動が出現し始めていたのである。

朝顔嬢は自らが語るように新時代の教育を受け、女権が強い国に対する強い期待を抱いており、渡米する以前から父権制度や「家」中心の日本の結婚制度に異を唱えて、自らの意に添わぬところで決定されるお見合い結婚に屈辱を感じていた。そして海を渡り、米國社会を観察し、様々な人々と交際するに従って、さらにこの父権の強い日本社会に対する反発心を強くしていることがよみとれる。

朝顔嬢は、「有らゆる仲人を入獄してもらひたい」といい、日本の「仲人」の習慣が日本人女性の自立を妨げているのだと述べる。米國人女性には自ら夫を探すという《大事業》があるため必然的に生活態度も《利口》になるが、それに比べて《時世に後れて》いる日本人女性は仲人が適当な男を連れてくるのを受動的にただ待っているだけで主体性が育っていないと論じる。「仲人」の存在がなければ、女性たちには自らの人生に対する責任感が高まり《利口》になるというのである。⁶⁵

お見合い結婚をせまる父親を《縁日の見世物の木戸番の様》だといって、その手紙を破り裂いてしまふ。彼女は、「穢い相談には厭き〜」だと嘲笑って、叔父と次のように会話をしている。

『何程日本の女があゝいふ膠でくっ付けられた結婚の重荷に堪へずに自殺するか知れやしないのよ。』

『それぢや自由結婚をいふの。』

『無論ですわね。』

……中略……

『だがね男と知人になるのは娘の罪とも思はれる國で如何して男を知ることが出来るの。』

『一體全體日本の萬事が悪いのよ叔父様。』

『御前日本人に産れたのが可哀相ね。』

『ですから私日本などへ歸へりませぬ、日本の女に見せる字書にはノー（否）といふ字が入つて居ないのですからね、だが私はノーといひたい時ひますわ。私の頭には頭文字のノーといふ字があるのを記憶して置いて頂戴、私は革命者なのです。』⁶⁶

彼女は日本女性が抑圧された存在であることを主張し、父権社会に堂々と反意を示す自らを「革命者」だという。彼女と同様に、日本の閉塞した社会から逃れて渡米しようとした『或る女』の主人公・葉子は《自分でも知らない革命的とも云ふべき衝動》（六）に翻弄されて生きた女性であったが、批評の対象を明確にして自ら《革命者》だと宣言する朝顔嬢には、より強い自覚が表出している。しかし、朝顔嬢も最初から日本の結婚制度に反対していたわけ

はなかった。渡米当初は、祖母が婚礼を楽しみにしていたことを思い出し、『未だ一人で結婚』していない自分に不安を感じている。

『私自分で無経験の小説家が主人公を如何してよいか分らぬ様に自分を如何していい、か分らないのよ。』何時婚禮が出来るでしやうか。』と自らの将来と結婚に懸念を感じている。しかし、米国での生活経験や交際経験が増えるにつれて、とくに、ロスアンゼルス滞在中に米国人男性に恋愛感情を抱いたことから、心境が変化してゆき、確固とした結婚観をもつようになったといえる。この作品に描かれる『男女交際』についての問題は、また稿を改めたい。

さて、以上のように、渡米経験者を含む当時の知識人たちによる女子渡米奨励の言説の中心は、良妻賢母思想を軸にして殖米の成功を求めたものであり、この『日本少女の米國日記』は、それらの社会状況とあいまって、女子の渡米を示唆する内容と情報を読者に与えていたと考えられる。が、その一方で、朝顔嬢の日本の結婚制度や父権制度に対する批判は、この作品がそれだけのものではないということを明らかにしている。

渡米女性に対する警告

さて、この作品が伝えているものについて、さらに考察してみた。朝顔嬢は生気を失った日本の移民男性たちを観察して、彼等のためにも日本人女性が渡米してくることを望む、と発言している。

『私上陸以來進歩的な顔してゐる東洋人見たこと無いのですから、皆なが木の枯れた様な人で、きつと靈魂なるものは死につゝあるのでしやう。』

『そりや、此處の日本人は女を持つて居ないからよ』と叔父様は決論するのよ。

時々叔父様は利口ですよ。

何故米國人に戀をしないのでしやう。

私日本の政府に女を送る様歎願したいわ。

だがね不器量な者ばかり來たら日本の女の名譽を滅茶苦茶にするでしやうと私後で思つたのよ。

奇麗な娘など海を越えて亞米利加三界へ來たくは無いわね、家に居て花嫁に成る機會が澤山あるのですからね。』

普通に何不自由ない女性たちであれば遠く海を越えてアメリカへ來たい気持にはならないということである。では、朝顔嬢は渡米者の現実の生活をどのようにみていたのだろうか。

朝顔嬢が知り合いとなる日本人女性・お藤さんは三十過ぎであり、小さな煙草屋を経営している。彼女は、リュウマチの夫をサンノゼの温泉に連れてゆかねばならず、朝顔嬢に店番を頼むことになる。

お藤さんは若くして病氣の夫を抱え、仕事と看病を両立させること

を強いられている。夫の年齢は明らかではないが、朝顔嬢をなんとか楽しませようとして、タイミングを外したぶざまな笑いをみせる男である。お藤さんは、朝顔嬢に夫の不平不満をぶちまけている。朝顔嬢はこれに対して「夫婦とはそういうものである」と述べているにとどまり、不満の内実や具体的な会話は記されない。

このような日本人移民の様子は、渡米奨励にうたわれるような理想的なアメリカの移民社会の描写ではなく、現実のそれであるといえるだろうと思われる。厳しい労働の結果、夫はリュウマチを患い、妻は小さな煙草店の収入で生活費を賄いながら夫の看病に明け暮れているのである。

つまり朝顔嬢の《奇麗な娘など海を越えて亞米利加三界へ來たくは無いわね》という発言は、このような移民者たちの様子を認識している者の意見なのである。経済的に困窮した女性や、日本社会からはみ出したような女性でないならば、自ら敢えて渡米して苦勞する必要はないと暗に伝えている。

また、朝顔嬢の、家同士が取り決める日本の結婚制度についての鋭い反発は、移民社会の《写真花嫁》に対する意見につながるだろうと思われる。当時、多くの女性渡米者とその家族は、在米男性から送られてくる写真と情報信じて、見たことのない男性との結婚を決定し、米國に渡ってからはじめに現実に衝撃を受けたといわれる。⁽⁹⁾ 朝顔嬢が繰り返し述べるように、結婚は家と家との問題であ

り、個人の意志はあまり考慮されなかった時代である。《写真花嫁》たちは、当初それほど疑問を感じずに渡米することを決めたのかもしれないし、或いはむしろ、女子の渡米奨励論に支えられて、アメリカに嫁ぐことに希望さえもっていたかもしれない。⁽¹⁰⁾

この日本的結婚制度によって、相手を確認することもできずに渡米し、辛酸をなめることとなる日本女性の現実を、朝顔嬢ひいては作者の野口が把握していたといえる。朝顔嬢は、親や仲人の取り決めに従って意志なく結婚する日本女性たちに警告を与えているといえるのではないか。

当時、米國社会では《写真花嫁》をピクチャー・ブライドと称して、善悪を論じていたようである。⁽¹¹⁾『日本少女の米國日記』は、家中心の日本的結婚制度を朝顔嬢の言説を通して米國の読者に教示し、移民社会で話題となっていた《写真花嫁》問題が、その伝統的結婚の意識から成り立っている社会問題であることを説いたといえる。また、それに対して新しい世代の教育を受けた者たちは、自覚的になりつつあることを示しているといえる。

要するに、朝顔嬢の日本的結婚制度に対する言説は、米國に渡ってくる日本人女性たちの現実を知っている者としての示唆的な側面があったと思われるのである。読者に対して、家の取り決める結婚に無防備に従う女性に対して米國人女性を比して自立を求める一方で、日本の父権制度を批判している。そしてその見解は、米國社会で眷

き起こっていた日本女性の写真結婚への批判的風潮にも対応するものだったのである。

作品内に描かれる移民社会と反日感情

次に、この作品が当時の日本人労働者を受け入れた米国社会の实情をいかに表わしているかということを探りたい。理想を掲げて海を渡った日本人移民たちの実情や、米国社会の現実を垣間見ることのできるのだろうか。

大きな期待と興奮を抱いて到着した米国の最初の印象は、朝顔嬢にとって感嘆狂喜するものではなかった。米国に到着した時、朝顔嬢は悪い《狐に誑れた》ように感じ、米国の現実を次のようにとらえた。

《波止場の大八車の臭氣がたまら無いのですよ、ごとくいふ其の音で頭痛が仕ます、支那人の一隊は悪いシガアの臭氣を絶えず吹かしてゐますのです、私桑港の市長なら（市長朝顔嬢なんて小説的ね）一刻の猶豫無く波止場あたりに無銭の御湯屋を建てますわ。

私人間でこんな忌な臭氣がすると思つたことは無かつたのですよ。

大八車の馭者様の臭氣つて猿の臭氣よ。

其の恐ろしい顔まで猿に似てゐるのですもの。》

サンフランシスコ港に到着した彼女は、汚さと臭氣に驚き、《米国の夢など滅茶〈くよ〉と述べる。理想の国〈アメリカ〉に対する憧憬と興奮は、港特有の乱雑さと臭氣という現実を突きつけられて、急速に色褪せ変化している様子がよみとれる。また《一揆の様な、耳が聾になる大亂痴氣》と街の騒音、街に《痰吐》する人々の非常に多い事実などについて書き記している。

しかし、朝顔嬢は、失望を感じている〈アメリカ〉の現実について書き記すことを敢えて避けた。彼女は《町で見た》現実を日記に《幾百行》も書いたのであるが、《『何も批評せむが為め、意地悪くしたい為めに亞米利加へ來たちや無いから』》⁽⁸⁾といつて、《切れ〈に破いて紙屑籠に〉棄ててしまつてゐる。切れ切れの断片には、米国女性が《横浜の人力車の様に走》り、子供を泣かせて《女らしい所》を失つてゐるという姿、《禮帽子をかぶつた紳士》が《手鼻をか》む姿、《年若いお嬢様》が《歩きながら忙しさにガムを噛んで》ゐる姿、などが描写されていた。

日記前半では米国の一般家庭の様子や庶民の生活についてあまり記していないが、次第に一般の人々の生活に注目し、それを描写するようになる。

彼女は、日本人街の、知人・お藤が経営する小さな煙草屋を一週

間切り盛りすることになる。お藤は、病気の夫を温泉に連れてゆくために一週間閉店することで、客が減るのではないかと心配していた。それを知った朝顔嬢は、お藤に向かって、『留守中店を私に貸しませんか』と提案する。お藤は、店の立地が《桑港中でも一番人氣の悪い所》であるからと辞退しようとしたが、朝顔嬢は《面白い事だ》と思い込んで強く志願する。

朝顔嬢がここで経験する米國社会の实情は、ロスアンゼルスなどで経験した上流階級の暮しとはまったく異なっている。朝顔嬢は、裕福な親的な米國人ではなく、労働者階級の米國人を観察することになる。また、日本人移民の様子、米國における日本人の境遇の現実を目の当りにすることになる。その煙草屋の周囲は酒屋が多く、そのために酔っ払いが多い場所治安が悪い。朝顔嬢は《ヘロマベービ、ヘロマハネー》と声を掛けられる。が、彼女はそれほど動揺もしていないようで、淡々とその現実を描写しているのみである。

朝顔嬢は、日本人男性労働者の無氣力な様子を描写している。日本人の渡米労働者たちは、店番をしている日本人女性である朝顔嬢に言葉を掛けるのが嬉しいために、ちよくちよく店に寄る。朝顔嬢はそのことにうんざりして、『あんな顔見るのもうんざり』していると述べる。同時に、彼等に同情もしている。朝顔嬢と叔父が会話している部分を引用してみたい。

《桑港の日本人こそ可哀相よ。

『ジャブ！ジャブ！』

隅々からあんなに呼ばれるのね。

だが私ジャブといふ聲好きですから私の日記の中にジャブと書き入れるのよ。』

ここには当時の出稼ぎ日本人男性の様子が照らし出されている。

ひとつにはまず、日本人の出稼ぎ労働者の《木の枯れた様な》、人として《靈魂》を喪失したかのような、無氣力感と精力喪失の事態が描かれる。

そして、先程も述べたように、日本人男性の無氣力感の原因のひとつが、恋愛対象となる女性や家族がいなかったためであるということを描いている。朝顔嬢が日本人女性の渡米の必要性を認めているのである。

またここに描かれているもう一点は、日本人労働者が受けていた排日的な現地の実態を明らかにしていることである。日本人が《ジャブ！ジャブ》という中傷を街のあらゆるところで投げつけられているという現実を表している。実際に、米國社会における日本人差別や排日は表出しつつある問題であった。

日本人労働者の増加とともに排日感情は高まり、「ジャブ・ゴ・ホーム」「ガッテム・ジャブ」「イエロー・ジャブ」「ダー

ティー・ジャップ」など、侮蔑の落書きや立て看板がみられたという。差別は言葉だけではなく、道を歩いていると唾をかけられたり、石を投げつけられたりしたようである。また、店のショーウィンドーを割られたり、店の入り口に馬糞をぬりつけられたり、日本人労働者キャンプが暴漢たちに襲われたり、物理的、身体的な攻撃が日常化したようである。このように一九〇〇年代初頭は、日本人移民にとって現実の生活や労働も大きな苦難であったが、白人から受ける差別や排斥も非常に厳しいものであったのである。

『日本少女の米國日記』の描写からは、渡米者が直面する厳しい移民社会の実情をうかがうことができる。朝顔嬢の《桑港の日本人こそ可哀相よ。『ジャブ！ジャブ！』隅々からあんなに呼ばれるのでね。》という言葉からは、差別から受ける痛みは全く感じていないかの如くである。しかし、彼女が、それまで接してきた上流階級の米国社会と全く異なる米国社会の日本人への対応に、少しも衝撃を感じていないはずはない。

朝顔嬢は、『ジャブ』という声が好きだから日記に書き加えるのだ、と書いているが、これはあからさまな詭弁であると思われる。米国到着の当初、『何も批評せむが為め、意地悪くしたい為めに亞米利加へ来たぢや無い』と言って雑然とした米国社会の現実を書き残さなかった（書いたものを破り捨てた）彼女を考えれば当然の言い訳であろう。不平不満や嫌悪感を催すようなことを日記の中で

できるだけ書き残したくないと考えている朝顔嬢は、『ジャブ』と呼ばれて日本人差別を感じながらも、気にしていないと虚勢をはっているようにみえる。

また、米国読者に向けては、ジャブと呼ばれることを気にしないと言言することで当時の米国人の東洋人差別に対しての批判や挑戦の意味をこめていたと考えられるし、また日本人読者にとっては、差別の現実を目の当りにしながらも屈せず堂々と生きる日本女性・朝顔嬢の様子を示したということがいえよう。

貧しい苦学生であった野口は、労働生活の中で多くの屈辱的な体験をし、米国社会の日本人差別の現状を痛感していたはずである。それをユーモアにして、現実を見据えながらもそれに負けない意志と軽く受け流して前向きに生きる精神とを主人公の中に描いたのではないか。

朝顔嬢の語り口はコケティッシュで快活にみえる。が、無心を装う描写の裏には、日本人排斥の風潮、つまり理想的な生活や成功の実例ばかりを強調する多くの渡米奨励や、渡米案内などにはみられない側面が示されている。

米国社会の「日本」認識に対する不満

朝顔嬢の描写が未熟であり、米国社会における日本人差別の現実に対する、作家の動揺は隠蔽されているのだが、それにはまず、こ

の作品が日記形式をとっているということがいえる。基本的に一人称で書かれた主観的・情緒的な話であり、なおかつ、その一人称の視点人物が〈少女〉であるということ、対象に対する認識や描写の精密度に限界が出ているといえる。また、少女が書く日記という設定のために、前述した如く、米國に憧れる少女として書きたくないことは削除したり、嫌なことは考えないというような、逃避の方向、或いは、隠蔽の方向に向かってしまう。

では、著者・野口の主張や精神の内奥は、この作品構造の中に完全に埋没しているのかというところではない。野口は、朝顔嬢に求めることができない主張を、朝顔嬢の叔父の日記の中に表出させているとみることができる。作品の後半になって、叔父の留守中に朝顔嬢が彼の日記をこっそり盗み読みする場面がある。

《最不幸なのです、私は多年間米國に於ける日本の流行を目撃しました而してまだ其の極點に達しない様です、日本に關する書物は毎月出版せられるのでありますが、其の頁を切るのですへ讀んで失望するのですから悲しき至ります、……中略……日本を論ずると藝者やお辭義する習慣を擧げるのであるが日本には更に價值のあるものがあるのである、若し米國人が日本を愛するのが紙で作りたる提燈が氣に入つたなどといふことなら吾人は其の愛を拒絶するのである、……中略……私は米國人は理

解力を缺いて居ると思ふこと時々あるばかりでないのである⁽³⁾

……》

ここには、米國社会や米國人が〈日本〉に対して抱いている誤った認識に対する不満が述べられている。《藝者》《お辭儀》《提燈》ばかりが日本文化ではないことを主張し、日本の美について認識を深めて欲しいという要求をしているといえる。

また叔父の日記には、一、二年前に川上音二郎一座が渡米公演した⁽⁴⁾ことについて、《日本芝居の一行が此の地に漂泊して來ました、彼等は本國では俳優として許されて居ないので》と述べている。実際に渡米前の川上が日本で行き詰まっていたことは確かである。そして、米國を巡業する彼等一行が金のために舞台で踊っていることを嘆いている。

《第一流の批評家でもかゝる拙劣なる技藝よりして何かの意味があるべしと發見せむとて骨折つたのであつた、日本に居らば破産しなくちやならなかつた所が米國人が救助した⁽⁵⁾》

米國巡業で成功した川上一座に対して、不快感をあらわにしているのである。野口は、日本では認められないような浅薄な舞台が、日本の演劇の代表とみなされていることに憤慨しているのである。

金のため、人気のために間違った日本のイメージを売って巡業していると、川上一座を批判しているのである。

このような米国の日本認識に対する失意の見解は、朝顔嬢によっても示されている。たとえば、朝顔嬢に日本の着物を着せてもらったエダが、『藝者』といふ芝居のまねだと言って『妙な歩み方』をしている^⑧。また、ある『寫眞師』から『藝者』の芝居をした役者の寫眞を澤山見せ^⑨でもらう場面では、『其の役者の馬鹿く』しさ加減たら。……中略……何といふだらし無い様子。彼の役者は着物の前さへ締めちや居ないので……中略……彼の役者の髪といつたら私非常な結い方にお目にかゝつたのですよ。化物式とでもいふのでせう』と、強く批判している。そして、『米國人は日本の娘とさへ云へば始終笑つてばかり居る人形だ』と思つてゐるが、『合點が』^⑩いかないと述べている。『私等譯も無くて笑つて居る氣狂ひでしやうか。』^⑪と言うのである。また友人ドロシーは、次のような歌を歌っている。

『「チヨンキナ！チヨンキナ！」

ドロシーは『藝者』の芝居で藝者が歌つた日本の歌だつて繰り返すのですよ。

……中略……

『藝者』といふ芝居は大日本に對して不正を働きつゝあると思

ひます。

私ある米國の領事ともいはれる人が同じ歌をある宴會で歌ひ出したのを思ひ出しました。

其の人は其の後私は紳士と思は無くなつたのです^⑫。』

これらからも分かるように、この一座が米國人に与えた印象は非常に衝撃的なものであり、日本人の代表格のようにみなされていた。朝顔嬢は、この日本のイメージが日本人からみると異様であるということを数度にわたつて述べている。しかし前述の如く、彼女の意図には視点人物としての限界があり、深く追求した叙述にはならない。そこで、著者・野口は、作品の設定上、構造上、主人公に担わせることのできない部分を、朝顔嬢の叔父である日本人男性に代弁させているのである。

ここに述べられているのは、野口米次郎の日本人としての主張であらう。米國人が日本人や日本文化を誤つた認識でしか捉えてはいないことを知り、強い問題意識を覚えているのである。当時、はてしない希望を抱いて渡米した多くの日本人労働者たちの存在は、米國社会にとって排斥の対象になっていた。しかも米國社会では日本文化については『藝者』『お辭儀』『提燈』としか知られておらず、かつ、異様な劇団が誤つた日本人像を植え付けていたのである。

周知のごとく、欧米においては十九世紀より日本趣味がブームと

なっており、米國においても、一八八〇年代より、日本文化や日本社会を描いた小説群が生まれている。これらの作品群は、日本に対する典型的認識を、つまりサムライやゲイシャ、隷属するはかない日本女性などといったイメージを、定着させていたといえる。そのような中において、『日本少女の米國日記』は、日本文化や日本人に対する異なった視点を与えるものとなりえたのではないか。少なくとも、野口は、日本文化や日本人に対する軽薄な認識に異を唱えようとしたのである。

むすび

『日本少女の米國日記』という作品には、主人公による渡米憧憬、女性の権利を認める米國への憧憬が強く表されていた。これに関して本稿では、まずこの作品の背景にある当時の移民隆盛の風潮の中での女子渡米奨励の実態を捉えて、作品内に描かれている少女の位置と作品の意味について考察した。女子の渡米奨励の言説と渡米熱を支える作品であったことと同時に、米國移民社会の厳しい現実を映し出していることがあった。また、米國社会における日本文化認識についての、作家の批判も現れているということを述べた。

海外体験をする中で個人の内に表出してくるものについて考えたとき、「日本」という表象を希求すること、また自らの中の「祖国」

を再認識すること、が挙げられるであろう。日本社会における言説群とも異なり、また米國社会の中で表象される「日本」についての言説群とも乖離する、野口個人の言論がつくりだされる過渡期に当たるとは思わないかと思う。国家間で次第に特異な立場に置かれてゆく野口の、「日本」表象への願望や、「祖国」認識の形成の段階が表れているのではないか。

《渡米した瞬間から米國の文質的で富裕であることに驚いた……中略……もし私共の戦闘が物質的に行はれるとしたならば到底私共に勝目はない。私共は精神的ないしは藝術的に西洋人と闘はねばならぬ。それが日本人を彼らの地位にまで持ちあげる唯一の名案であると信じた。私は西洋人の弱點に打込む撃剣の一手がある。そしてそれは精神生活の一語で盡きる。》

野口米次郎の創作の原点は、ここにあるといえる。在米日本人としてアメリカを理解し、自國に卑屈になることなく独自性を示そうとしたのである。野口は長年の滞米経験の中で様々な経験をし、米國社会と日本社会の両方の現実を観察し、認識不足から生じている擦れ違いに異を唱えているのではないか。『日本少女の米國日記』は、そのような野口の原点となる作品であるといえる。

注

- (1) 拙稿「野口米次郎『日本少女の米國日記』の日米における評価」日本女子大学大学院の会・会誌 第二十二号 二〇〇三年三月
- (2) この作品は、一八九九年九月二十三日から一九〇〇年三月十九日までの日記形式で、上流階級の十九歳の朝顔嬢が叔父と共に米國に渡航し、異文化体験をする物語である。憧れの米國における生活体験や、友人やボーイフレンドとの交流、在米日本人たちとの関わりを自由に綴られたものである。途中に、栗鼠の視点でかかれた日記や、盗み見たという設定で叔父の日記などが挿入されている。
- (3) 本文テキスト 九月二十日～二十三日・東京
- (4) 〈渡米案内〉類の研究に関しては、今井輝子「明治期における渡米熱と渡米案内書および渡米雑誌」『津田塾大学紀要』第十六号 一九八四年三月 が立身出世主義と成功願望との関連の中で、主に渡米奨励者側が渡米志望者に与えた情報を調べ考察している。
- (5) 石川啄木「詩談一則〔東海より〕」を讀みて」『岩手日報』一九〇四年一月一日
- (6) 石川啄木 野口米次郎宛て書簡 一九〇四年一月二十一日
- (7) 渡米中の永井荷風は書簡（書簡三七〇（永井威三郎宛）一九〇四年十一月十二日 セントルイス）で《余は如何に厭はしくとも矢張り日本の作家となるよりしかたあるまい。二十歳以前に米國へ来て英文を書き始めた野口氏とは自分は経験を異にしてゐるから、到底父が希望する様な米國文壇の成功者となることは出来ぬ》と書いている。

- (8) 本文テキスト 十月二日渡航前
- (9) 『女學世界』（第五卷十一～十三號）に「米國家庭事情」と題した記事を三回連載している。野口自身の米國での家庭生活や体験談が華々しく語られ、『日本少女の米國日記』出版の紹介も加えられている。
- (10) 飯島立峰「米國女氣質」『女學世界』（第一卷九號、十號、十一號）一九〇一年
- (11) 飯島立峰（栄太郎）「米國渡航案内」博文館 一九〇二年四月二日発行
- (12) 竹貫佳水「アメリカ土産」『女學世界』第五卷七號 一九〇五年
- (13) たとえば一九〇三年の巖谷小波の「洋行の話」では、洋行に際して準備するもの、注意する習慣風俗、語学の準備、船中における諸注意などを記している。
- (14) 安部磯雄「米國土産」『女學世界』五卷十一號 一九〇五年
- (15) 安部磯雄「米國土産」『女學世界』五卷十一號 一九〇五年
- (16) 『日本移民論』（一九〇五年）には、北米の自由移民の労働所得は家内労働が一週間で一弗から四弗、農業労働が一日で一弗から四弗、工夫が日給一弗から三弗半、雑業（給仕や料理人）が一週間で三弗半から十弗であるとされており、實際この程度の賃金が日本人労働者たちに払われていた。
- (17) 《兎に角日本を出で米國へ上陸さへすれば其後の事は餘り心配する必要はありません。彼地には早晚女子の為に安全なる寄宿舎も出来ませう。亦確實なる人に紹介して貰ふことも出来ませう。》

『女學世界』第五卷十三號 一九〇五年

- (18) 吉田亮 (『アメリカ日本人移民とキリスト教社会—カリフォルニア日本人移民の排斥・同化とE・A・ストージ』日本図書センター 一九九五年) によると、教会の関係者たちは、キリスト教の人道的な立場から日本人移民を守ろうと尽力し、日本人排斥に対処しようとした。キリスト教会は、働くことすら出来ない渡米してきたばかりの日本人に英語の授業を行い、また、部屋と食事を提供し、仕事の斡旋までしていたという。

(19) 安部磯雄『米國土産』『女學世界』五卷十一號 一九〇五年

- (20) 《余は種々なる點より觀察を下し種々なる人の説を聽いて女子を多く彼地に渡航せしむるの必要を感じた。我同胞を無味乾燥なる生活より救ひ出さんとするには多くの女子を渡航せしむるに如くはない。》(安部磯雄『北米の新日本』博文館 一九〇五年九月、五章)

(21) 安部磯雄『北米の新日本』前掲書

- (22) 島貫兵太夫は日本で渡米希望者の指導と援助を行った人物。一八九七年、キリスト教信仰に基づく社会改良と救貧事業のために東京労働会(のちの日本力行会)を組織し、苦学生に周旋をした。

(23) 「渡米女子の成功要訣 島貫しか子實驗談」『女學世界』六卷十三號 一九〇六年

(24) 本文テキスト 一月十三日

- (25) 対応する英文テキストでは、*「It may ruin the Japanese girl's name, was my after-thought, if they ship only the homely gang,」*となる。

(26) ユウジ・イチオカ「二世 黎明期アメリカ移民の物語り」刀水書房 一九九二年 四四—四七頁

- (27) 政府は、海外に在留する日本人は日本国の代表者であるとの観点から移住希望者には出国許可の申請を義務づけ、健康状態、教育程度などを調べ、日本人としての誇りをもっているかどうかをもチェックしていた。

- (28) 《渡米男子が誘惑せらるゝと同時に婦人も誘惑せられ易いのは彼の醜業婦の跋扈が主なる原因であります彼等は人間の何者であるかを解せず、墮落漢の膏血を絞つて、多いものは一ヶ月千弗内外の収入を得、豪奢自由に暮らして居るのを見ますと、思慮なき婦女子は粒々辛苦が馬鹿らしくなつてツイ邪道に陥るのです。一度これに踏み入れれば容易に足を洗ふ事が出来ませんので、實に恐る可き誘惑であります。斯様な次第ですから、彼地に行かうと致す婦人は如何程教育の度が低くとも切て人間の品性が分かつて居るものでなければ成りません。》(「渡米女子の成功要訣 島貫しか子實驗談」前掲書)

- (29) ロナルド・タカキ『もう一つのアメリカン・ドリーム—アジア系アメリカ人の挑戦—』岩波書店 一九九六年) によると、アメリカ社会からも、日本政府や一般の日本人からも疎まれた存在である「醜業婦」とは、経済的困窮から、売春周旋業者に売られた貧しい農村や漁村の出身者、また、誘拐されたり騙されたりした女性たちである。これらの女性たちは、捏造されて語られる「理想の国」アメリカに無邪気に期待し、米國で売春斡旋人である日本人男性によって稼ぎを奪われ、威嚇され隷属させられた、最も不幸な形で送り込まれた女子渡米労働者である。

(30) 『女學世界』には「在米勞働者の生活」と題して労働者の妻が移民の現実を寄稿している。

(31) 本文テキスト 十二月五日 ロスアンゼルス

(32) 《女子の仕事も種々であるが、其最も適當なるは 姆或は下女である。我邦に於て教育ある女子が下女奉公をなすが如きは思ひもよらぬ事であるが米國に於て下女の働をなしたりとて左程不思議な事はない。勿論彼地に於ても下女の事は多少賤められて居る所があるから給料は少なくとも店の賣子になる方を好む女子もある様だけれ共、概して言へば日本に於けるが如く職業に貴賤上下の區別を設けることはない。故に教育ある我女子が彼地に於て下女奉公をなしたりとて怪むべきこともなければ亦これが結婚の妨害になる様なこともない。》(安部磯雄『北米の新日本』前掲書)

(33) ロナルド・タカキ『もう一つのアメリカン・ドリーム—アジア系アメリカ人の挑戦—』前掲書

(34) 《家庭の助手としての日本婦人の好評は、實に青陵生の紐育通信にもある如く、米國西部に於ても亦其通りであつて、予も在米中八方から米國人の知友に、日本婦人の雇入れを頼まれて、人が少い為に、いつも謝絶して居つた位である。》(吉村大次郎『渡米成業の手引』岡島書店 一九〇三年 第七章)

(35) 《婦人の方にも亦た男子のスクールボーイと同じく、一日数時間家庭の用を助けて、毎週壹弗半位な給料を貰ふて差支なく学校へ通学する方法がある、これをスクールガールと稱する。又た終日の働きならば多くは子守給仕役等であつて、給料は食住の外拾五弗乃至貳拾弗位なものだ、其他手先きの利く女ならば、刺繡、編物、レ

ース、シャツや小児服の裁縫等割の善い内職が幾らもある。》(吉村大次郎『渡米成業の手引』前掲書)

(36) 吉村も、《政府も民間も共に大に獎勵せねばならぬ大理由》は、日本人男性の移民としての定着である、とする。《其社會の半部面たり、組織力たり又た調和者たる可き婦人を》供給する政策を取らなくてはならないのである。《憐れ在米の日本人》は、女性がいけないから《何時までも身と心が定まらず、家を成さんと欲するも之を成すに由なくして、所詮永久の發達》ができないのだと述べている。(吉村大次郎『渡米成業の手引』前掲書)

(37) 「米國家庭事情」『女學世界』第五卷十一(十三號)(三回連載) 一九〇五年

(38) 「米國家庭事情」『女學世界』第五卷十一號 一九〇五年

(39) このような職業について、尾崎行雄は、卑しい境遇のために日本人の自尊心を失わせ、性質を卑屈にすると非難した。アメリカ人が日本人の代表としてスクールボーイを考えることによって、《日本全体の汚辱》を生むことになる述べた。また、陸奥宗光は、教育をうけるつもりで渡米する出稼ぎ書生(スクールボーイ)たちは、アメリカの家庭で奉公人氣質を植えつけられて、立身出世の初心をも忘れて墮落すると批判した。

(40) 『米國日系人百年史』新日米新聞社 一九六一年

(41) 武田勝彦著『荷風の青春』(三笠書房 一九七三年三月十五日)によると、荷風はニューヨーク・ヘラルドに Japanese general houseworker wants position in small family. Nagai 17 Concord, Brooklyn (一九〇五年七月九日) という広告をさせている。

- (42) Wallace Irwin 'Letters of a Japanese Schoolboy "Hashimura Togo" ' 1909
- (43) 本文テキスト 九月三十日
- (44) 対応する英文テキストでは『No Oriental man is qualified for civilization, I declare. Educate man, but—beg your pardon—not the woman! Modern girls born in the enlightened period of Meiji are endowed with quite a remarkable soul』である。
- (45) 本文テキスト 一月十八日
- (46) 本文テキスト 一月二十三日
- (47) 本文テキスト 十一月九日〈祖母の命日〉
- (48) 本文テキスト 一月十三日
- (49) 本文テキスト 一月十日
- (50) 〽〽に对应する英文は『Her husband struggled to entertain me. His clumsy smile appeared all the time at the wrong cue. Poor Mr. What's-his-name!』である。
- (51) ユウジ・イチオカ『一世 黎明期アメリカ移民の物語り』前掲書
- (52) 写真花嫁は『一世の生活に安定と向上心とをもちたらし』た存在であり、『見知らぬ国でまだ見も知らぬ夫とともに、あてもない未来に立ち向かおうとしたところには、彼女らの克己の念に満ちた不屈の精神を認めざるをえない』という。一般的に彼女たちは『教育程度においても、日本文化の理解においても、夫に立ちまさって』おり、家の中の育児や家事労働をはじめ、家の外でも労働し、不安定な家庭を支えたといわれる。(R・ウィルソン&B・ホソカ

- ワ『ジャパニーズ・アメリカン』有斐閣 一九八二年)
- この花嫁たちの教養について、大正四年の米国の日系新聞には、『写真結婚に依りて渡米する妻女の容色、多くは美にして其の教育も亦相当のものなりと聞き、将来同胞自然的発展の根底となり、甘じて日本人系統のアメリカ人を造るの母となり得べきを知りて、転た快愈に耐へざるもの也』と書かれている。写真花嫁とは、経済的に貧しい女性たちが非常に悪く言えば売買婚のような形で渡米したという側面もあるが、ある程度の教養もある女性たちがアメリカでの新しい生活への期待から渡米していたという側面も考えてよいだろう。つまり、政府や明治知識人たちがもくろんでいた教養のある女子の殖民が成功していたといえよう。
- (53) 今野・藤崎『移民史3』新泉社 一九八六年 一一五—一二七頁
- (54) 本文テキスト 十月二十一日夜
- (55) 本文テキスト 十一月十日
- (56) 本文テキスト 一月十三日
- (57) 一九〇〇年、日本に対する脅威を感じはじめていたカリフォルニアの白人たちは、桑港の市民集会では日本人排除法を要求するに至る。一九〇五年には日本人排除を目指すサンフランシスコ・クロニクル紙のキャンペーンが始まり「日本の侵略」を特集、日韓人排斥協会も創設されている。この会は桑港の市長が中心となり、各種労働組合が参加していたという。『移民史3』(今野・藤崎前掲書 一七七頁)によると、一九〇六年四月のサンフランシスコ大震災では一万人近くの日本人が焼け出されたのであるが、白人たちは桑港

再建をこれらの日本人排斥から始めようとしたといわれる。また、焦土の中の三十軒ほどの日本人経営の洋食店は、《凡ゆる暴行を加》えられ、《営業中止は勿論のこと、全く財産を破壊せられたものが続出した》という。また、《その他の日本商店も頻々として強盗に襲はれ、一人の銀行頭取は殺害された》という。

(58) 本文テキスト 二月二十三日

(59) 一八九九年、川上音二郎は妻・貞奴を含む一座を引き連れて渡米した。サンフランシスコ公演で日本的な演出として上演された「娘道成寺」は、日本橋の芸者であった貞奴の初舞台であった。これが評判を呼び、アメリカ全土で成功を収め、翌一九〇〇年の二月から四月まではニューヨークで公演、六月にはロンドン公演、七月にはパリ万国博覧会にて公演をしている。一九〇一年に帰国してのちも、再び四月に渡欧し、スペインからロシアまで十四ヶ国を巡業している。

(60) 本文テキスト 二月二十三日

(61) 本文テキスト 一九九八年十一月一日

(62) 本文テキスト 十一月十七日

(63) 本文テキスト 十一月二日

(64) 野口米次郎「藝術の日本主義」『人生讀本 春夏秋冬』第一書房 一九三七年 三五〇—三五三頁。